シーワールドのアニマル達

●オウサマペンギン

オウサマペンギンは、体長95cm、体重15kgになり、ペンギンの中で2番目に大きく成長する種類です。卵の暖め方が特徴的で、1つの卵を足の上で暖め、ふ化後もヒナが小さいうちは足の上で育てます。鴨川シーワールドでは平成2年にオウサマペンギンの飼育が始まり、平成6年と9年にヒナが誕生し育っています。

平成10年にロッキーワールドが完成し、13羽のオウサマペンギンも新居に引っ越しました。新居は太陽の光が入らない地下にあり、点燈時間や明るさが年間を通して一定であったためか、本来集団で発生する換羽時期がバラバラで、その後の産卵時期も不安定でした。そこで平成12年5月から、照明時間を屋外の日照時間にあわせ、また光の強さも変更してみました。すると集団で換羽するようになり、産卵する個体も増えました。また、以前に発生していた親鳥による卵の放棄や破卵を防止するために、親鳥には擬卵を抱かせておいて本物の卵はふ卵器で暖めて、ふ化直前にすり替えてみました。こうした工夫の結果、今年7月26日と8月4日に続けて2卵がふ化し、ヒナは順調に育っています。ふ化後約40日頃からは係員からもエサをもらって食べ始め、今では体重が約12kgになり親鳥と同じぐらいの大きさです。しかし、まだふわふわの茶色い綿毛に覆われていて、「ピーピー」と鳴きながら親鳥について行くかわいい姿は、見所充分です。

(小林 夕希栄)

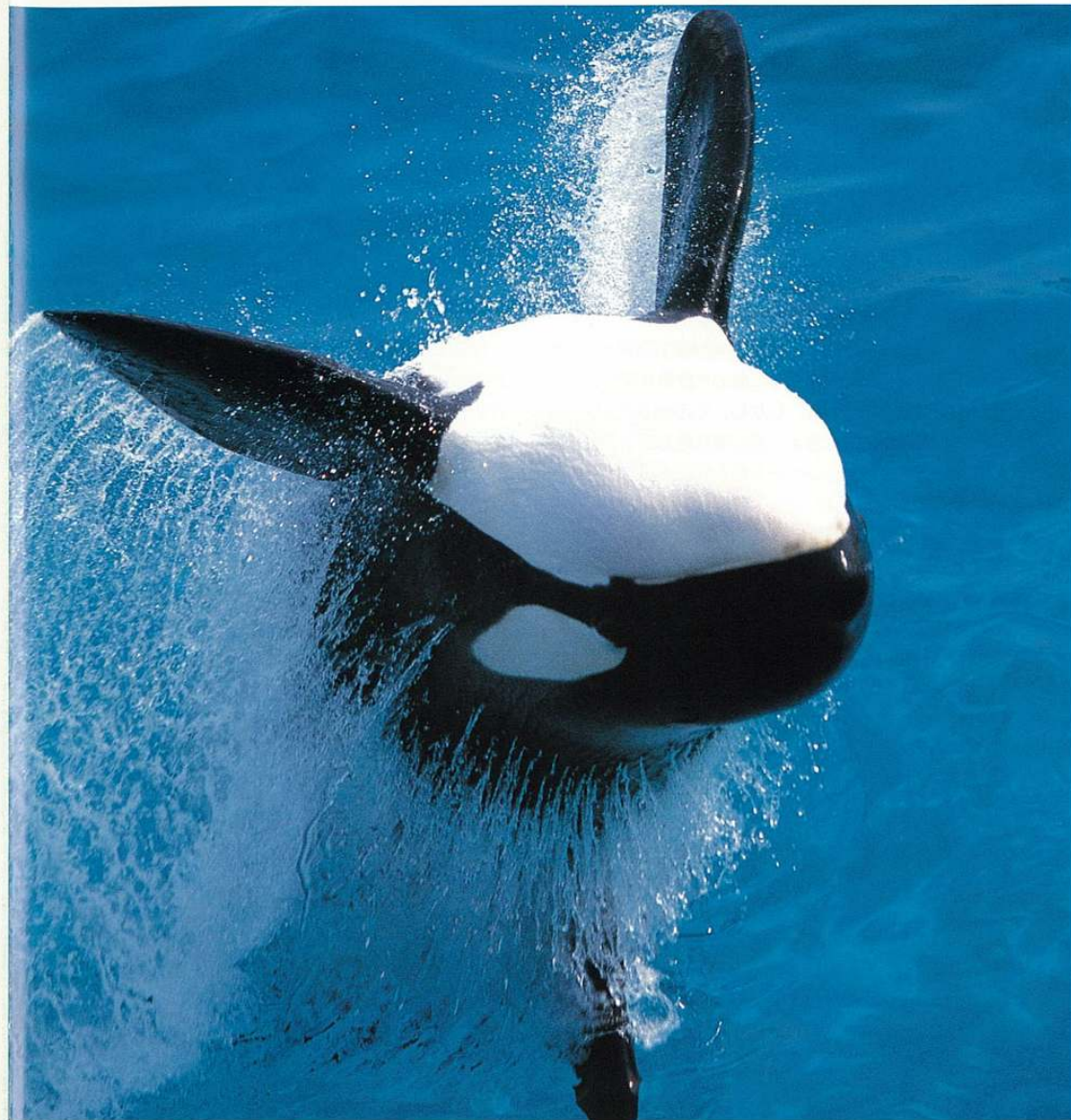
▲オウサマペンギン *Aptenodytes patagonicus*

●ギンザメの一種(スポッテッド・ラットフィッシュ)

ギンザメ類はサメの仲間ではなく、サメ・エイ類とは太古の時代に別の進化をした全頭類に分類されます。世界に31種が知られていて主に深海で生息をし、体の特徴としては、暗黒の世界で光を得る大きな眼、背びれ前の大きな棘、オスの額には交尾器を持つなどがあげられます。日本では蒲鉾などの練り製品の原料として利用されますが、水族館での飼育例は少なく謎の多い魚です。

バンクーバー水族館（カナダ）から贈られてきた4尾のスポッテッド・ラットフィッシュは、アラスカからカリフォルニア沖に分布するギンザメの一種です。初めての飼育でわからないことも多く、受け入れや展示には細心の注意を払いました。光に大変敏感な魚で、最初は水そうの周囲に暗幕を設置し薄明かりの中で飼育を始めました。しかし、飼育はできても、暗い状態では観覧することができないので、水そうの照度を測定し、調光機を使って展示できる明るさまで、徐々に慣らしていきました。誤って急に明るくしてしまった時はキリモミ状態の異常遊泳となってしまったほどで飼育係もハラハラしました。エサはエビ、貝、魚肉などを試しましたが、オキアミが好物でした。エサを与えた時には、それまでスローだった動きが素早くなり、エサをさがす姿からは匂いや他の刺激にも敏感であることが伺われます。試行錯誤の結果、現在では展示水そうで大きな胸びれを上下させて水中をはばたくように泳ぐ姿が人気を集めています。

(齋藤 純康)

▲ギンザメの一種 *Hydrolagus colliei*

さかまた No.60 (禁無断転載)

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470) 93－4803

発行日 平成14年12月

http://www.kamogawa-seaworld.jp

さかまた

鴨川シーワールド NO. 60

▲ララ　ステラ　ラビー　ビンゴ　オスカー　総勢5頭

鴨川シーワールドとシャチ

鳥羽山　照夫
鴨川シーワールド名誉顧問

鴨川シーワールドは日本で初めてシャチを飼育してから今年で32年目をむかえました。そして、今ではシャチは鴨川シーワールドのシンボルになっています。ここでは現在に至るまでのシャチについてのいくつかのエピソードを紹介してみます。

東京湾でのシャチ生け捕り大作戦

鴨川シーワールドは、今から34年前の1968年9月に千葉県鴨川町の東条海岸に魚の水族館を建設することで計画されました。しかし、その後のアメリカの水族館視察後、急きょ、海の哺乳類も飼うことになり、アメリカからシャチを輸入する交渉も始められました。ところが、オープン前の1970年4月23日、東京湾の千葉県市原港の水路に11頭のシャチが迷い込み、5頭は殺され残る6頭は東京湾へと逃走したというビッグニュースが飛び込んできました。めったにない絶好の機会です。翌日からヘリコプター1機と巻き網漁船、タグボートなど9隻の船舶および鴨川シーワールドのスタッフ15名による空と海からの東京湾でのシャチ生け捕り大作戦が始まりました。そして25日には4頭のシャチを網でまくことができましたが、シャチのひと暴れで網は破られもう一息のところで逃げられてしまいました。その後は東京湾からシャチの姿が消えた5月12日までシャチとの追いかけっこを続けましたが、ついに生け捕ることができずに失敗に終わってしまいました

▲巻き網の中で泳ぐシャチ（東京湾）

日本初のシャチ飼育に挑戦

東京湾でのシャチの生け捕りが失敗してしまった以上、残るはアメリカからのシャチが頼りです。しかし、6月に来るはずのシャチは、「まだ捕まらないので遅れる」とのことでした。「10月1日のオープンに間に合うのか？」気持ちだけがあせる日々が続きました。9月4日、待望のシャチ2頭（オス、メス）がアメリカ・シアトルから特別なコンテナーに入れられて到着しました。ウエットスーツを着たスタッフ10数人が水深を浅くしたプールで緊張気味にシャチを待っています。クレーンで吊り下ろされ担架がはずされたシャチは、やや体を傾けながら勢いよく泳ぎ始めました。おそるおそるシャチの周りを取り囲んでいたスタッフたちは、そのとたんにいっせいに蜘蛛の子を散らすようにプールの壁際に張り付いてしまいました。しかし、すぐにシャチの周りに集まり、長旅によってしびれた尾ビレと左右の胸ビレのケアーを始めてくれました。

▲無事泳ぎ始めたジャンボとチャッピー

到着した2頭のシャチは、その後は新しい環境にも馴れて、日本で初めてのシャチの飼育が始まりました。オープンに間に合ったこれら2頭のシャチは、その後、公募によりオスは「ジャンボ」、メスは「チャッピー」と名付けられました。

鴨川シーワールドからシャチが消えた

アメリカから輸入され日本で初めて飼育された「ジャンボ」と「チャッピー」は、飼育を始めてから3年6ヶ月目にオスの「ジャンボ」が、その3ヵ月後にはメスの「チャッピー」が相次いで死んでしまいました。鴨川シーワールドからシャチがいなくなったのです。「ジャンボ・チャッピー」に続くシャチを入手しなければと世界中に問い合わせてみましたが、タイミングが悪くどこにもシャチの生け捕りを行っている国は見つかりませんでした。探すこと5年3ヵ月、1979年10月に極圏の国アイスランドでシャチが捕まったという朗報が届きました。取るものもとりあえず、アイスランドの首都レイキャビックに飛びました。レイキャビック近郊の屋根付きプールには5頭のシャチが泳いでいました。血液検査の結果、5頭とも健康状態は異常なし。早速、日本までの長距離輸送に耐え新しい環境にも馴れやすい若い個体の中から2頭を選び、アイスランドを離れました。この2頭のシャチは1979年11月にアイスランドの厳しい冬を避けてカナダのナイアガラフォールにあるマリンランドに移された後、1980年2月に日本に到着しました。鴨川シーワールドで再びシャチの姿を見てもらうことができるようになったのです。

▲イルカプールでのシャチショー　キングのターゲットジャンプ

シャチの新居と子シャチの誕生

これ以後はシャチの入手と健康管理に努めたかいがあり、鴨川シーワールドではいつでも「海の王者」シャチとの出会いができるようになりました。そして1984年2月には昭和天皇の行啓があり、イルカと同居しているシャチのショーを御観覧いただきました。その折のことです。お帰りのお車に乗られる直前に、思い出されたかのように、「イルカとシャチが一緒にいたが問題はおこらないか」とのご下問をいただきました。思わず出た「仲良く平和に暮らしています」の答えに、天皇は「アッそう」と軽い笑みを浮べてお車に乗られたことを今でも鮮明な記憶として残っています。シャチの飼育が安定した17年後の1987年3月には、2,200席の海に向かった観客席と水深6メートル、総水量4,800トンを有するシャチの新居が完成しました。そしてこの新しいシャチプールは「オーシャンスタジアム」と名付けられました。シャチたちも新しい施設ができたお陰でのびのびと暮らすことができるようになり、飼育28年目の1998年1月には、13歳のメスのシャチ「ステラ」が日本で初めての子シャチを出産しました。誕生したシャチは「ラビー」と命名され、その3年後の2001年2月に同じ母親の「ステラ」から生まれた「ララ」と一緒に鴨川シーワールドの新しいアイドルになっています。

▲ステージ上にランディングしたイルカと遊ぶカレン

▲日本で初めて生まれたラビーと母親ステラ

トピックス

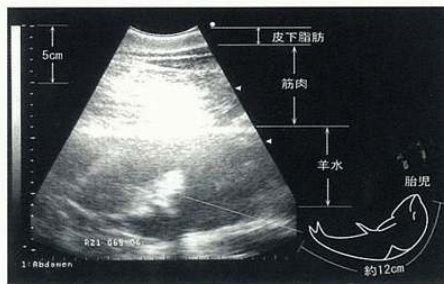
日本初！バンドウイルカの人工授精に成功

▲内視鏡を用いての人工授精

今年7月1日から7日にかけて3頭のバンドウイルカに人工授精を行い、このうちの2頭の妊娠が確認されました。

人工授精は、採取したオスの精液を新鮮あるいは凍結保存をして、別の場所にいるメスの生殖器に注入することによって子供を作る技術で、牛などでは普通に行われています。しかし、イルカの繁殖については知られていないことが数多くあったので、当館の国際海洋生物研究所（所長　鳥羽山照夫）では、20年前から研究者と共同で、繁殖について一つ一つ調べを進め、様々な問題を解決しながらようやく人工授精にこぎつけました。

▲超音波診断装置により卵巣を調べるトッド・ロベック獣医

期間中は、姉妹水族館であるアメリカ・シーワールドのトッド・ロベック獣医や一緒に研究を続けてきた三重大学　吉岡基助教授も滞在して、昼夜を問わず注入時期を調べるための超音波検査が行われました。そして、最も良い時期をとらえて人工授精が行われました。

▲超音波診断装置により映し出されたスリムの胎児（3.5ヶ月令）

人工授精が終了して、3ヶ月後の超音波検査で「スリム」と「メル」のお腹に赤ちゃんがいることが分かりました。出産は2頭共に来年7月の予定で、無事に赤ちゃんが生まれるまでは目が離せない日が続きそうです。

バンドウイルカで成功したこの技術は、将来は希少イルカにも応用されると期待されています

（勝俣 悦子）

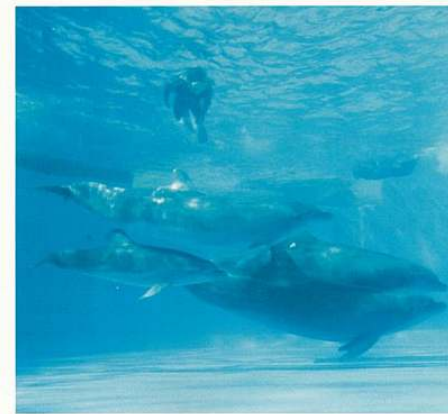
オープン32周年記念 ドルフィンスイム

▲一緒に泳ごう！

鴨川シーワールド開園32周年を記念して10月12・19・26日にイルカの海でイルカと一緒に泳ぐ“ドルフィンスイム“を行いました。参加者は、458名もの応募者の中から選ばれたシュノーケリングができる21名です。素潜りの上手な参加者は、プール底でじっとしてイルカを見ていたり、イルカと少し距離をおいて一緒に泳いだりと余裕が見られましたが、うまく潜れなくても、水面で浮いてイルカをながめたりと様々にドルフィンスイムを楽しんでいる様子でした。はじめはイルカも驚いた様子でしたが、次第に落ち着いてきて、逆に変わった訪問者たちを観察しているかのようでした。

私たちがイルカたちを見るときはプールのうえから覗き込む感じですが、このドルフィンスイムは、イルカと同じ生活空間で、より一層イルカを身近に感じることができる素晴らしい時間です。ドルフィンスイムの後は、参加者の表情も明るくなり、やや興奮気味に「楽しかったぁ！」「かわいいねぇ」「最高！」との声が聞かれました。これからも、この感動を多くの方にもっと味わって頂くことができたら、最高です！

（加藤 加奈）

▲さあ準備はいかがですか？

▲はじめはイルカもちょっとびっくり…。

セラ セラ

●3年目を迎えたドルフィンキャンプin鴨川

平成12年より「イルカの海」で、昭和大学医学部と共同で「ドルフィン・アシステッド・セラピー」を実施し今年で3年目を迎えました。「ドルフィンキャンプ」は、6才～12才の自閉症患者6～7名が、イルカとの触れ合いを通して治療を行う3泊4日のキャンプです。最初はイルカに無関心だった子供たちも、回を重ねるごとに水中でイルカの鳴き声を聞いたり、エサをあげたり、中には背ビレにつかまって泳ぐ子供もいて、徐々にイルカとの交流も増えてきました。家族や医療チームのスタッフのからは、「いろいろな事に興味を示す様になった」などの声も聞かれ、参加したトレーナーにとってもすばらしい体験になりました。（山田 かおり）

●「海亀の浜」から稚ガメを放流

8月14日に、鴨川シーワールド前の東条海岸でアカウミガメが産卵しましたが、産卵場所は台風の波で洗われる危険があったので、一部の卵42個をウミガメの繁殖施設「海亀の浜」に収容しました。毎日砂の温度を測りながら、状況を観察していたところ10月24日に、無事稚ガメが誕生しました。稚ガメは10月27日に約300名の観客が見守る中、「海亀の浜」の特設通路から海へ放流しました。今回のふ化は、近い将来「海亀の浜」でウミガメが産卵し、稚ガメが自らの力で海に旅立って行くことを確信させる意義深いものとなりました。

（中坪 俊之）

●アシカの赤ちゃん誕生

「アシカ・アザラシの海」で6月22日にカリフォルニアアシカの赤ちゃんが誕生しました。母親は鴨川シーワールド生まれの「セラ」、父親はかつてのアシカパフォーマンスのスター「ホープ」です。生まれた当初は、標準よりからだが小さく、鳴き声も弱々しかったため、係員を心配させましたが、その後の経過は順調で同じプールにいるアシカ達にいたずらするほどに成長しました。現在は、ロッキーワールドで元気な姿を見ることができます。まだお母さんのお乳を飲んでいますが、エサの魚にも興味を示し始めています。所狭しと遊び回る、小さなアシカにぜひ会いに来てください。

（堀江 裕実子）

●トロピカルな夜、海底宿泊体験

今年の夏は猛暑が続き、まさにトロピカルサマー。トロピカルアイランド「無限の海」大水そう前で、寝袋持参で宿泊体験できる「トロピカルな夜、海底宿泊体験」の参加者を募集したところ、10日で393人の参加がありました。当日はトロピカルアイランド裏方見学や夜の水族館探検、トレーナーと一緒の食事、難解水族館クイズに挑戦などを楽しんだ後、幻想的な大水そうを前にそれぞれ寝袋を広げ、遊泳するマダラトビエイやシイラなどの魚たちを見上げながら眠り？につきました。翌朝は太平洋を目の前にしてのラジオ体操や海岸散策など楽しい宿泊体験でした。

（荒木 孝）